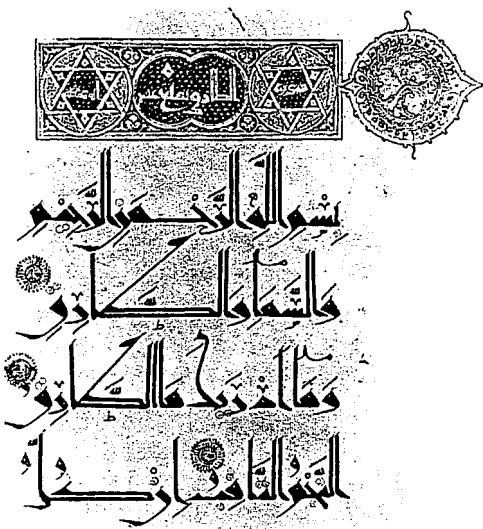


図6 後期(1156年)のジャリール書体(الحمد لله
على نعمة)



出典: Grohmann (1963) による.

図7 東部クーファ書体によるコーラン(11世紀,
86章1-3節)

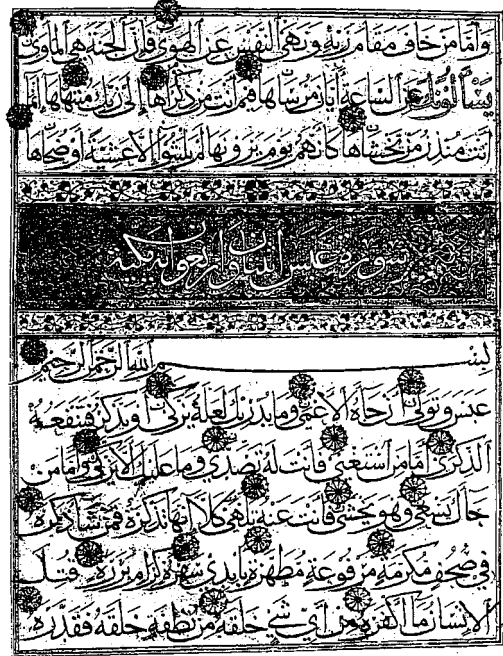


出典: al-Fārūqī (1986) による.

角は残すが、全体として丸みを帯びた大きな文字を使用する。この書体から後代の書体が生まれるので「筆の父」と呼ばれ発展したとされているが、残る資料は多くない。

3)クーファ書体(Kūfī script) 前述のクーファ・バスラ書体に関連する書体で、8世紀初めに存在したのは確実であるが、都市名クーファとの関係は明らかでない。角ばった文字で、空白を埋めるため文字幅を大きく広げることが特徴。コーランの書写、建築物・墓碑の碑文、貨幣、器具への刻文など、宗教的・装飾的な威厳が求められる場合の書体である。北アフリカの政

図8 スルス書体によるコーラン(14世紀,79章
末尾と80章冒頭)



出典: Coulmas (1996) による.

治的分立が進む10世紀には東西に分かれ、西部ではマグリブ書体(後述)に発展する。東部では、斜めの線を強調する左傾書体のほか、装飾的要素が発展し、線の端や連結部分に葉・花・編み織・動物をあしらったものまで生まれた(図3, 図7を参照)。

4)ナスフ書体(Naskh script) 製紙工場の建設(10世紀, スペインでは12世紀)により優れた書材が普及し、文書作成量も増大すると、細い文字線で均一的な形の、丸みを帯びた読みやすいナスフ書体が生まれた。簡潔で判読しやすいため、1000年頃を境に、コーランの筆写でも、従来のクーファ書体からナスフ書体に交替した。ちなみに、ナスフとは「筆写」の意味であるが、これが現今の一般的な印刷用書体となっている(図2)。この時期までに補助記号を含む正書法も確立し、紙の安定的供給が可能となり、優美で洗練された書体が発達する条件が整い、書道理論(後述)も生まれた。のちに、伝書鳩便に使用された小さな文字のナスフ書体から、行間の注記など、微細な文字用のゲバル書体(Ghubār script)も生まれた。

5)スルス書体(Thuluth script) ナスフ書体から発展した装飾用の書体(図8)。建造物、工芸品、書物の装飾部分などに使用される。文字線が伸縮自在で、一定の空間に収めるため、他の文字の上下の隙間も利用する。13世紀にはナスフ、スルス、ルクア書体のほ